

The 14th Annual Meeting of
Japanese Society of Community Psychology

日本コミュニティ心理学会

第14回大会

プログラム・発表論文集



大会テーマ：楽しもう 多様性

会 期 ◆ 2011年 7月16日(土)・17日(日)

会 場 ◆ 上智大学 四谷キャンパス

大会長 ◆ 久 田 満

副大会長 ◆ 丹羽 郁夫

The 14th Annual Meeting of
Japanese Society of Community Psychology

日本コミュニティ心理学会 第14回大会

楽しもう 多様性

会 期 ◆ 2011年 7月16日(土)・17日(日)

会 場 ◆ 上智大学 四谷キャンパス

大 会 長 ◆ 久 田 満

副大会長 ◆ 丹羽 郁夫

ごあいさつ

日本コミュニティ心理学会第14回大会

大会長 久田 満 上智大学総合人間科学部心理学科
コミュニティ心理学研究室

日本全体が、心理的、経済的、さらには政治的危機状態にある中で、このたび第14回大会を開催させていただくことに“運命”を感じております。第1回の準備委員会(2010年10月3日)では、地の利を生かして最大の研究発表数と参加者数の達成を目標に掲げましたが、「3.11」以来状況が一変し、準備も滞りがちになり、研究発表数も予約参加者数も昨年比で40%近くの減少となりました。関東以北の大学では、年度の変わり目である3月、4月が慌ただしくて、7月の予定が定まらなかったことがその理由のようです。

しかし、そのような状況にもかかわらず参加して下さる方々には、準備したプログラムや企画を含めて、より一層のおもてなしをさせて頂こうという方針に変わりました。大会テーマも「楽しもう多様性」と決まりました。

大会初日は、大会企画講演として長瀬修先生(東京大学大学院経済学研究科)に、コミュニティ心理学の基本的考え方とも合致する障害学(Disability Studies)の概念や視点について分かりやすく解説して頂きます。つづくシンポジウムでは、長瀬先生に加えて、ゲイやレズビアンと呼ばれるセクシャルマイノリティの支援活動을続けて来られた精神科医の平田俊明先生と、大学病院内の院内学級の教師として重い疾患をかかえた子どもたちの教育に携わって来られた副島賢和先生に、多様性を活かし、そして楽しむ社会を実現させるために何が必要かを語り合って頂きます。

二日目には、2つのワークショップ「コミュニティとの遭遇－学校への入り方」と「学会のあり方を考える－Webによる学会員のニーズ調査から」、さらにパネルディスカッションとして国際交流委員会企画の「コミュニティ心理学の世界的動向と国際化に向けた取り組み」がございます。その他にも、「東日本大震災支援活動報告会」が特別企画として立ち上がりました。この企画の詳細は当日お知らせいたします。

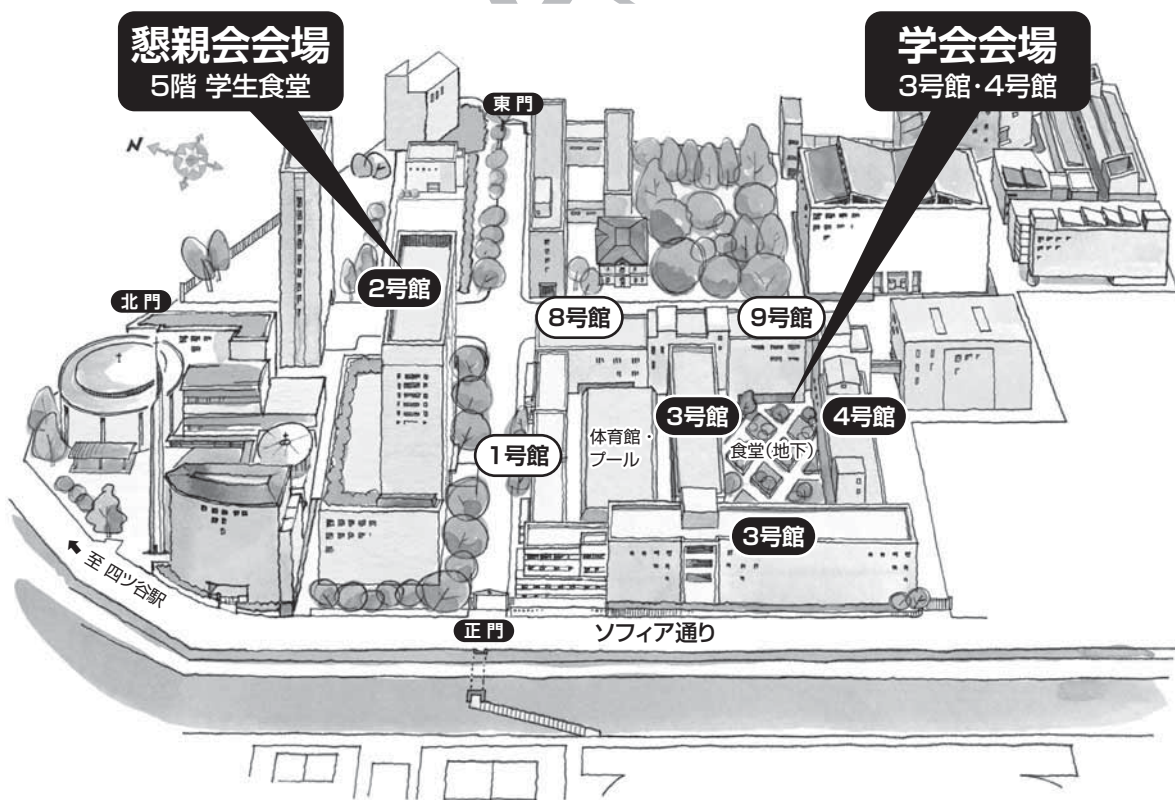
今回の会場となる上智大学は、いわゆるキリスト教カトリック系の大学です。1913年に当時のローマ教皇の命を受けた3人のイエズス会(1534年に初代総長イグナチオ・デ・ロヨラらが創設した男子修道会)の神父達によって設立されました。しかし、そのルーツは、1549年来日したフランシスコ・ザビエルの志(日本の首都に大学を作りたい)にまでさかのぼります。「Men and women for others, with others(他者のために、他者とともに)」を教育理念に掲げており、われわれスタッフ一同もこの精神にのっとり運営に携わってまいります。

猛暑の上に「節電」が予想され、みな様方には不快な思いをされるかもしれません。また、このプログラム集の発送が遅れたことも含めて、大会の前・中・後に行き届かない点が多々生じるかもしれません。何卒ご理解・ご容赦下さいますようお願い申し上げます。

みな様のご参加をスタッフ一同、心よりお待ち申し上げます。

2011年6月

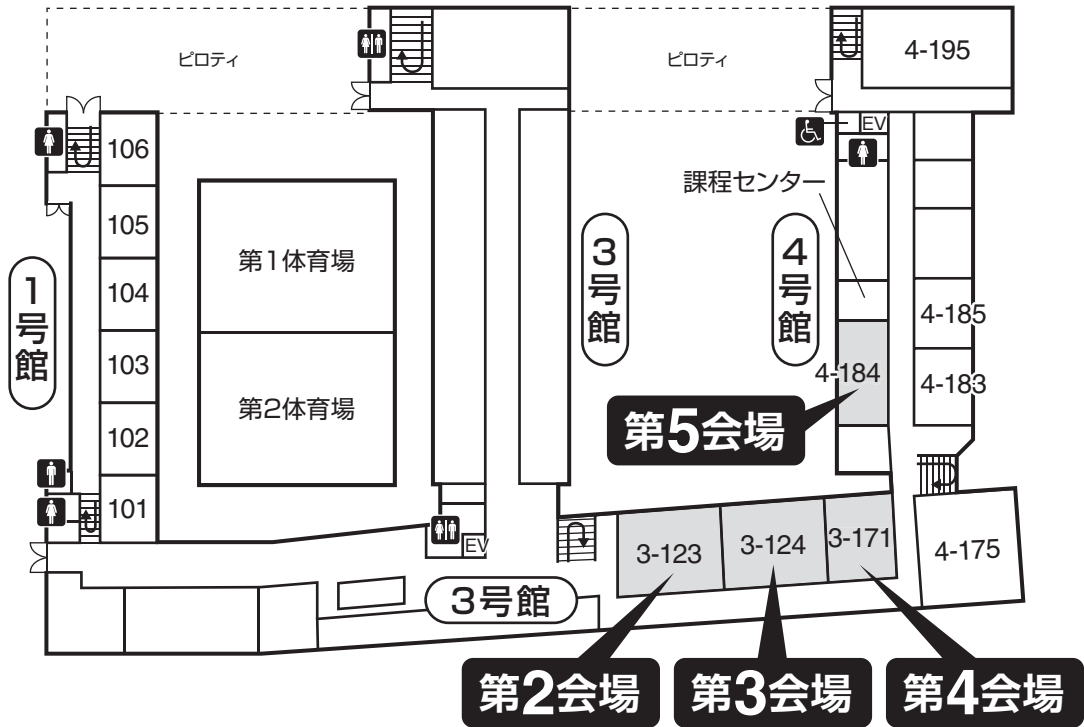
交通アクセス



会場案内

上智大学 3号館・4号館

1F



5F



大会参加案内

1. 受付

受付は、3号館の1階にて行います。受付開始時刻は、2日間とも9:00となっております。

学生の方は、学生証を携帯してご参加ください。

大会期間中の連絡などは、受付横の掲示にてお知らせいたします。

2. 参加費等

大会参加費	正 会 員	予約参加：6,000円	当日参加：7,000円
	非 会 員	予約参加：7,000円	当日参加：8,000円
	学生会員	予約参加：3,000円	当日参加：4,000円

※学生であることを証明できる書類をご提示ください。

懇 親 会 費	予約参加：4,000円	当日参加：5,000円
---------	-------------	-------------

※原則予約制です。余裕がある場合のみ当日受付を行います。

3. 名 札

受付にて名札をお渡しします。氏名・所属を記名し、会場内では必ずご着用ください。

4. 総 会

日 時 7月17日(日)13:00～14:00

会 場 3-124教室(3号館1階)

5. 懇親会

日 時 7月16日(土)18:00～20:00

会 場 2号館5階学生食堂「銀座スエヒロ」

人数に余裕がある場合、当日参加も受け付けております。

6. 特別企画 東日本大震災支援活動報告会

7月16日(土)16:45～17:45 3-521教室(3号館5階)

7月17日(日)10:00～12:00 4-184教室(4号館1階)

特別企画として、東日本大震災における支援活動報告会を行います。事前の参加予約は必要ありません。

7. パネル・ディスカッション、ワークショップ

日 時 7月17日(日)14:30～16:00

会 場 パネル・ディスカッション : 3-124教室(3号館1階)

ワークショップ1 : 3-171教室(3号館1階)

ワークショップ2 : 4-184教室(4号館1階)

事前の参加予約は必要ありません。お気軽にご参加ください。

8. ランチョンセミナー

日 時 7月17日(日)12:00～13:00

会 場 3-171教室(3号館1階)

事前の参加予約は必要ありません。お気軽にご参加ください。昼食はお持ち込みいただけます。

9. 院生の集い

日 時 7月16日(土)12:00～13:00

会 場 4-184教室(4号館1階)

事前の参加予約は必要ありません。院生の方はお誘い合わせのうえ、お気軽にご参加ください。

院生以外の方の参加はご遠慮ください。

10. 書籍展示・休憩室

4-183教室(4号館1階)にて、書籍展示・販売を行います。同じ教室に休憩スペースもご用意しております。お気軽にご利用ください。

11. 喫 煙

会場内は全面禁煙となっております。大学指定の喫煙所をご利用いただきますようご協力をお願いいたします。

12. 駐車場

緊急車両を除き、駐車場の用意はございません。ご来場の際は、公共交通機関をご利用ください。

13. 理事会

日 時 7月15日(金)18:30～20:00

会 場 四谷キャンパス(9号館5階 心理学科図書資料室)

14. 編集委員会

日 時 7月15日(金)17:00～18:00

会 場 四谷キャンパス(9号館5階 心理学科実験室2)

研究発表案内

A. 口頭発表

- 受 付：会場に15分前までにお入りください。
- 構 成：各セッションは、2時間で構成されます。
- 発 表：1件につき15分以内
- 質 疑：1件につき5分以内
- 機 器：Windows で PowerPoint が作動します。
(Mac をご使用の方は、各自でお持ちください。アダプターもお願い致します。)
データは USB でお持ちください。
- 資 料：当日、資料を配布される方は、各自で必要部数(50部程度)をご用意ください。
配布に関しては、会場係がお手伝いいたします。なお、資料回収を必要とする場合には、発表者が責任を持って回収・処分してください。
- 運 営：運営の詳細は、座長に一任されます。(※時間は厳守でお願い致します。)

B. ポスター発表

- 受 付：会場に15分前までにお入りください。
- 構 成：各セッションは、2時間で構成されます。
- 在 席：奇数番号の方は前半1時間、偶数番号の方は、後半1時間です。
- 質 疑：在席責任時間に、活発な質疑・討論をお願いします。
- 資 料：当日、資料を配布される方は、各自で必要部数をご用意ください。
- 形 状：横80cm×縦180cmの範囲に収まるよう作成してください。ポスター上部に、発表タイトル、氏名・所属を明記してください。
- 掲 示：受付で掲示に必要な画鋏をお渡ししますので、セッション時間内は指定の場所にポスターを掲示し、終了後は速やかに片づけをお願い致します。

1日目 2011年 7月16日(土)

	第1会場 3号館 5階 3-521	第2会場 3号館 1階 3-123	第3会場 3号館 1階 3-124	第4会場 3号館 1階 3-171	第5会場 4号館 1階 4-184
9:00	9:00～ 受付開始・会場				
10:00		10:00～12:00 ポスター発表 1 P1-1～10	10:00～12:00 口頭発表 1 O1-1～5 座長：北島 茂樹	10:00～12:00 口頭発表 2 O2-1～5 座長：高島 克子	
11:00					
12:00	12:00～ 昼食・休憩				12:00～13:00 院生の集い
13:00					
14:00	13:30～14:30 大会企画講演 障害学の視点 司会：久田 満 講師：長瀬 修				
15:00	14:45～16:30 大会企画 シンポジウム 多様性を楽しむ社会の実現に向けて 司会：加賀美 登美代 シンポジスト： 長瀬 修 平田 俊明 副島 賢和				
16:00					
17:00	16:45～17:45 特別企画 東日本大震災 支援活動報告会				

18:00～20:00 懇親会 (会場：2号館 5階 学生食堂)

2日目 2011年 7月17日(日)

	第1会場 3号館 5階 3-521	第2会場 3号館 1階 3-123	第3会場 3号館 1階 3-124	第4会場 3号館 1階 3-171	第5会場 4号館 1階 4-184
9:00	9:00～ 受付開始・会場				
10:00		10:00～12:00 ポスター発表 2 P2-1～10	10:00～12:00 口頭発表 3 O3-1～5 座長：高橋 直	10:00～12:00 口頭発表 4 O4-1～5 座長：渡辺 直登	10:00～12:00 特別企画 東日本大震災 支援活動報告会
11:00					
12:00	12:00～ 昼・食・休・憩			12:00～13:00 ランチョンセミナー 投稿のすゝめ －研究論文の書き方の コツ教えます 企画：編集委員会 講師：久田 満 大石 幸二	
13:00			13:00～14:00 総 会		
14:00					
15:00			14:30～16:00 パネル・ディスカッション コミュニティ心理学の 世界的動向と国際化 へ向けた取り組み －日本のコミュニティ心理 学の国際化のこれから－ 企画：国際交流委員会 パネリスト：北島 茂樹 伊藤 亜矢子	14:30～16:00 ワークショップ 1 コミュニティとの遭遇 －学校への入り方 企画責任者：丹羽 郁夫 話題提供者：黒沢 幸子 萩原 豪人	14:30～16:00 ワークショップ 2 学会のあり方を考える －Webによる会員の ニーズ調査から 企画責任者：久田 満 話題提供者：箕口 雅博 山本 耕太 調査協力者：矢部 祐里菜
16:00					
17:00	17:00 閉 会				

プログラム

大会企画講演・シンポジウム

大会企画講演 7月16日(土) 13:30～14:30 3-521教室(3号館5階)

障害学の視点

講師：長瀬 修(東京大学大学院経済学研究科)

司会：久田 満(上智大学)

大会企画シンポジウム 7月16日(土) 14:45～16:30 3-521教室(3号館5階)

多様性を楽しむ社会の実現に向けて

シンポジスト：長瀬 修(東京大学大学院経済学研究科)

平田 俊明(しらかば診療所)

副島 賢和(昭和大学病院内さいかち学級(品川区立清水台小学校))

司 会：加賀美登美代(お茶の水女子大学)

パネル・ディスカッション

パネル・ディスカッション 7月17日(日) 14:30～16:00 3-124教室(3号館1階)

コミュニティ心理学の世界的動向と国際化へ向けた取り組み —日本のコミュニティ心理学の国際化のこれから—

企画：国際交流委員会

パネリスト：北島 茂樹(日本赤十字九州国際看護大学)

伊藤亜矢子(お茶の水女子大学)

大会企画講演

大会企画シンポジウム

パネル・ディスカッション

ワークショップ1

ワークショップ2

ランチョンセミナー

特 別 企 画

障害学の視点

講師：長瀬 修(東京大学大学院経済学研究科)

司会：久田 満(上智大学)

【講師略歴】

上智大学外国語学部英語学科卒業、
Institute of Social Studies (修士)修了
青年海外協力隊員(ケニア日本語教師)、
八代英太参議院議員秘書、国連事務局員、
東京大学先端科学技術研究センター特任
助教授等を経て、2006年3月より東京大学
大学院経済学研究科特任准教授

【主な論文・著書】

- 「障害者の権利条約策定過程と NGO を通じた障害者の参画－障害学(ディスアビリティスタディーズ)的観点から」『国際人権』16号 2005年報
- 『障害者の権利条約－国連作業部会草案』明石書店 2004
- 『障害学への招待：社会、文化、ディスアビリティ』明石書店 1999
- 「障害の文化、障害のコミュニティ」『現代思想』1998
- 「＜障害＞の視点から見たろう文化」『現代思想』1996

日本語では「障害」という一言で表現される事象を、身体や精神のレベルである「インペアメント」(impairment)と、社会的障壁によってもたらされる社会的抑圧・不利益である「ディスアビリティ」(disability)とに分離し、後者に焦点を当てる社会モデルは、障害の文化という視点や、障害者の参加と共に、障害学(ディスアビリティ・スタディーズ)の基盤である。

2006年暮れに国連総会が採択した障害者の権利条約の策定過程では、障害者の参加を示す“Nothing about us without us”(私たち抜きに私たちのことを決めるな)という言葉が繰り返された。この条約には、社会モデルや「差異の尊重」という言葉に示される障害の文化という視点をはじめとする障害学の視点が盛り込まれている。

日本政府は2007年秋に同条約の署名を行い、現在は、同条約の批准に向けて、障害者制度の改革を行っている。2009年9月に発足した新政権のマニフェストは障害者の権利条約に必要な国内法の整備を行うとし、そのために障がい者制度改革推進会議(推進会議)を2009年12月に発足させた。推進会議のメンバーの過半数を障害者と家族の代表が占めているのは、日本の障害者政策立案過程においても、“Nothing about us without us”が求める 障害者の参加が実現したことを示している。

推進会議は、障害者の権利条約の批准に向けて、障害者制度改革に関する意見を昨年中にまとめた。そこには、社会モデルをベースにした障害者の定義や、合理的配慮の欠如を差別とすることなどが盛り込まれ、その意見を反映する方向で障害者基本法の改正案が今国会に提出されている。

2011年3月11日の東日本大震災をどう受け止め、復興に立ち向かうかは、障害学にとっても大きな課題である。社会モデルをはじめとする障害学の視点を、東日本大震災の復興、日本社会全般ひいては国際社会の今後に活かすために何が求められているのか考えたい。

多様性を楽しむ社会の実現に向けて

企画責任者：久田 満(上智大学)
シンポジスト：長瀬 修(東京大学大学院経済学研究科)
平田 俊明(しらかば診療所)
副島 賢和(昭和大学病院内さいかち学級(品川区立清水台小学校))
司 会：加賀美登美代(お茶の水女子大学)

コミュニティ心理学は、なぜ「地域心理学」ではないのか。コミュニティ心理学の「コミュニティ」にはどのような意味があるのか。この根源的な問いに対して山本(1986)は、こう述べている。本来「コミュニティ」というのは、人々が共に生き、それぞれの生き方を尊重し、主体的に生活環境に働きかけていくことを意味している。外在的に規定するようなものではなく、道徳的・社会的態度から成り立っているものである。そして彼は、その態度的意味を以下の4点にまとめている(P42～43)。

- 1) 人間を全体としてとらえる：貧しい人でも病める人でも、その人なりの価値観、生活の信条、生活の様式をもっており、その生の全て、生きざまの全てを大切にしたい関わりをすること。
- 2) 共に生きよう。共に生きているのだ。：人は一人で生きていない。おたがいの支え合いの中で生きている。ただ障害児だという先入観だけで普通学級からおいだされるのではなく、共に生きてゆける社会をいかにつくるかを目標とする。
- 3) それぞれの人が、その人なりにいかに生きていけるのか。けっして切り捨ての社会をどう追求するのか。：多人数の集団の価値観によって、少人数の集団が支配されてはいけない。それぞれの生き方を尊重しあう姿勢を大切にしよう。
- 4) 自分たちの責任で生きよう。われわれ一人一人の主体的参加が大切。：自分たちの社会は自分たちの責任で住みやすいものにしていかなければならない。

つまり、我々が取り組むべき課題は、各自が互いの個性を尊重しつつ助け合いながら主体的に変革し続ける社会の実現といえるだろう。そして、コミュニティ心理学の研究や実践を行う場合、この価値的態度を基盤にしていかななくてはならない。しかし、山本自身も述べているように、これを実現することは容易なことではない。

そこで、このシンポジウムでは、この困難な課題に真正面から取り組んでこられた専門家3名をお迎えし、その取り組みの中で何が困難で、それにどう対処しているのかを語っていただくことにした。各シンポジストに共通するのは、いわゆるマイノリティと呼ばれる人々との協働である。マイノリティを切り捨てるのではなく、逆に特別扱いするのではなく、彼らの個性を活かし、多様化を楽しむ社会の実現に向けて、フロアーの皆さんとともに活発な議論を期待したい。

【文献】

山本和郎(1986) コミュニティ心理学 - 地域臨床の理論と実践 東京大学出版会

口 頭 発 表

セルフヘルプグループの設立者の意図、その意義、 また課題は何か

○中田 智恵海

佛教大学

【問題と目的】

近年、セルフヘルプグループ（以下 SHG と記す）の援助の有効性などについては明らかにされてきたが、一方で SHG の運営を担う代表者がどのような意図の元に SHG を設立し、その抱える困難、後継者の不在といったマイナス面については未だ、語られることは少ない。

筆者が代表を務める（特）ひょうごセルフヘルプ支援センターでは SHG のディレクトリーを 2010 年まで 7 版発行した。2000 年当時、掲載団体は 76 団体に過ぎなかったが 2010 年には 276 団体と増加した。2000 年当初の 76 団体は現在も総て継続している。その内、代表者が交代している団体は 24 団体でしかない。多くの場合は当該の SHG を立ち上げた個人がそのまま代表者として継続している。その中には好んで代表を続けている場合もあれば、辞めたいけれど、後継者がいないために代表を継続せざるを得ない場合もあるだろう。後継者の育成は大きな課題である。

本稿では SHG の代表者はどのような意図のもとに SHG を設立し、どのような意義をもっているのかについて明らかにする。さらには後継者についても触れる。

【方 法】

精神障害 3 団体、身体障害 2 団体、発達障害 1 団体の併せて 6 団体の SHG の代表者を対象として 1 時間半の半構造化面接を実施し、GT 法を用いて分析し、

その結果を報告する。

1. 被面接者の人物紹介

全員が筆者とは 2000 年のセルフヘルプ支援センター設立以来、交流がある。

① 精神障害のある S 氏 50 歳代 男性

大学卒業後 10 数年間の引きこもりを経て 90 年代に保健所のデイケアに通い始め、そのメンバーらと共に精神障害者の SHG に発展させる。

② 精神障害のある W 氏 50 歳代 女性

結婚し子育て中に発症し離婚となる。作業所に通う内に全国の SHG と出会い、作業所の職員の協力を得て自らも設立する。

③ 精神障害のある T 氏 50 歳代 男性

発症後、貧困者の救済のためのボランティアをした後、仲間と SHG を設立し、その後、県内の精神障害の SHG の連合体を設立する。

④ 身体障害のある S 氏 50 歳代 女性

病気の後遺症で足が不自由。K 市で設立した SHG は全国に広まる。成人男子 2 人の母。障害福祉関連の月刊誌にも定期的に寄稿。

⑤ 身体障害のある子どもの母 I 氏 50 歳代

第一子に障害があり、その SHG の副代表を務めた後、代表となる。被面接者の中で唯一設立者ではない。

⑥ 発達障害のある H 氏 40 歳代 女性

2 人の女兒の出産後、離婚。2000 年頃、北海道に

ある大人の ADHD の会を知り、自分の居住地にも立ち上げる。

2. 面接からの分析

ここでは SHG 設立の動機についてのみ、一例として発言を示す。以下は面接の一部であるが、6 人の動機は共通していない。

I) まだ大人の発達障害があまり認められていない時だったので、情報がとても少なかったんです。(中略) まず情報が欲しいというところから始まったのです…

II) この保健所に集まったメンバーが、なんかやりたいというて、自然発生的にできたもの…

III) 自分たちのすることが SHG になるなんていうような見通しは無く、(中略) 同じ後遺症を持つ人同士なら今まで生きてきた人生で重なり合う部分が多いので、分かり合える…

IV) 精神障害って言うことは、もう人間終わりやなって私は思ったんですね。(中略) 誰かの役に立ちたいという思いは誰でもあるじゃないですか

V) やりたいことは反権力であったり、弱い者の力になろうとしたり、そういう部分でつながってるわけでしょ。

以上のように、情報を得たい、何かしたい、自分の思いを誰かに分かってもらいたい、誰かの役に立ちたい、反権力を表明したり弱い者の力になりたい、といったそれぞれ異なるニーズの元に、あるいはそれら幾つかを複合した思いで SHG を立ち上げている。何かやりたい、と立ち上げた代表者は後に行政の障害者福祉計画策定委員会の委員になり、当事者のニーズを訴える機会を得ている。何かしたい、という思いは社会の変革を実現している。

以上は面接で明らかになった一部にすぎない。

本稿では SHG 代表者にとってその存在意義に着目し、専門家、経験者、対社会、個人のエンパワメントの 4

つの基軸を下に SHG の存在意義を以下の 3 つに整理する。(・は発言のまま)

1) 社会に対峙して偏見や差別の軽減を図りながら、社会の一つのオプションとして場を提供できる。

- (理解されない、偏見や差別のある) 対社会に耐えていける場
- 社会から仲間を守る場
- 同じ経験をしている当事者が知り合う場、仲良くなれる場、自分や仲間が共感し、分かり合える場として、さらには生きていく場(社会に対するオアシスとして)

2) 個人の自己肯定感を醸成する

- 堂々と生きる、ということができるようになる。(エンパワメントの場)
- 変えられない障害という生活困難を肯定的に受け止める場となる。

3) 専門家との望ましい関係を形成する

- SHG は自分たちだけの場である。そのためには場の形成は自分たち当事者の中で能力のある人が創る。この条件が整って初めて機能するから、専門家を必要とする場合は検討しなければならない。
- SHG の維持のためには組織づくりが必要であるが、この組織づくりの段階で専門家との関係や後継者の問題などが生じる。

【まとめ】

SHG を設立した代表者にとって以上の意義があるが、SHG が課題とする後継者の育成は SHG を維持する上で重要な視点であるにもかかわらず、語られることは少なかった。今後は設立時に後継者についても考慮するように援助者は助言する必要があると思われる。発表時には上記 3 点についての発言内容を加えて分析結果について詳細に示す。

ポスター発表

全校型支援を行うスクールカウンセリングの理論的検討③ —学級をベースにした全校型支援の可能性—

○伊藤 亜矢子

お茶の水女子大学大学院

【問題と目的】

学校コミュニティでは、教師との協働による学校全体への支援がSCに求められる。しかし不登校など、一部の子どもへの対応がSCの役割と考える学校も多く、学校全体への関わりをSCが円滑に行えるとは限らない。そこで筆者は、常勤型の米国だけでなく、非常勤職として心理職が位置づく台湾やスコットランドなどで、全校型の心理支援がどう行われているか比較検討を行ってきた(伊藤, 2010a, b 2011)。それらから、非常勤心理職による支援であっても、モデルやシステム、教材などを整えることで全校型支援を行う工夫がなされ、機能していることが分かった。

ところで日本の学校では、生活集団としての学級が、校内生活において大きな位置を占め、担任教師が教科指導のみならず生活指導・進路指導などを手厚く行う特徴がある。全校型支援を考える際にも、支援の担い手や場として、学級担任・学級という要素は基本的な単位を構成すると考えられる。

そこで本稿では、海外の事例から、学級を基本単位とした日本型の全校型支援につながるとされる取り組みや基本概念のうち、レジリエントな学級・意欲的な学級づくりを目標とした取り組みについて理論的な検討を行うことを目的とする。両者をとりあげた理由は、単なる学級風土アセスメントを用いたコンサルテーションでなく、しかるべき教育的な目標となる理想の学級風土を掲げた上で、学級風土コンサルテーション行っていることからである。SC活動と教育活動は、本来方向性を異にするものではなく、健康な市民やよりよい生活環境づくりの担い手の育成という意味でも、好適な学級風土の醸成は重要と考えられる。

しかし、不登校の子どもへの支援など一部の子どもに特化した活動がSCの活動と認識されている場合、どうしてもSCの活動は「特別な子」への支援であり、教育活動全般とは関わりのないものという認識を生みやすい。結果として、SCと学校が一致した目標を共有しながら全校型支援を行うことが難しい。また、従来筆者が行ってきた学級風土コンサルテーション(伊藤, 2009)は、メンタルヘルス・コンサルテーションと同様に、学級の現状理解を深め共有・検討することで、教師の学級指導の手立てを考えるものであり、ある理想の学級風土を掲げて行うものではない。しかし、SCと学校との共通目標の設定やそれによる協働を前提とした場合には、コミュニティ・アプローチの掲げる「well-being」のように、ある総合的な理念をあえて掲げることで活動の方向性や性格が明確になり、協働が行いやすくなる利点も考えられる。そこで本研究では、レジリエントな学級・意欲的な学級を掲げた学級風土コンサルテーション方法を取り上げ、その内容と日本の学校事情に鑑みた場合の長短について理論的に検討する。

【方 法】

レジリエントな学級を掲げる ClassMaps (Doll 他, 2004) および、Motivated school のツールキットについて、文献資料および関係者からの聞き取り・資料収集を行い、検討した。

【結果と考察】

1. レジリエントな学級と ClassMaps

Benard (1993) は、レジリエントな子どもの資質を

「社会的コンピテンス」「問題解決スキル」「自主性・自律性」とし、それらを育む環境の構成要素として、「ケアとサポート」「肯定的な期待」「意味のある参加の機会」の3つを指摘した。ClassMaps は、これらの要素を体现することをめざして開発され、CMS (ClassMaps) 2007では、8つの下位尺度がある(Dollら, 2010)。8つの尺度は、学習に関する自己効力感、教師からのサポート、学習への取り組み、級友関係、規則の遵守、保護者との会話、級友からの侵害感、学級内の不和、となっている。また子どもが事態をどう捉えているかや、解決にむけて何を期待しているかなどを具体的にワークシートに記入しながら省察を深めるようになっている(Dollら, 2004)。

2. Motivated School のツールキット

McLean (2009) は、意欲的な学級について、所属感・有能感・自律感(主体性)を鍵概念として指摘する。子ども自身の性格特徴を考慮しながら、それぞれの子どもが学級内で、所属感や有能感を感じられるようにすることで意欲的な風土が生まれ、子ども達が主体的・自律的な学習者として意欲的に学ぶようになるという。所属感を養う「取り組み(engagement)」を促すこと、有能感を養う適切な「フィードバック(feed back)」を行うこと、自律感に繋がる「構造(structure)」のある教育活動を設計すること、それら全てを促進する「刺激(stimulation)」を投入することが、教師の役割であると McLean (2009) は指摘する。独特の図によって、子ども達の学習への姿勢や性格、それへの教師の対応、それらが重なった学級風土の成り立ちが理論化され、それに基づいて、学級風土等をアセスメントし省察しながら、教師の学級全体や子どもへの指導を考えるコンサルテーションが行われる。パッケージツールには、教師の省察のためのガイド、教師の考えについてのアセスメント、子ども達の考えについてのアセスメント、子ども個人プロフィールおよび児童・生徒用セルフ・プロフィール、学級風土アセスメント、の各ツールが含まれる。

【全体考察】

両方法は、狭義の学級風土のみならず、教師一生徒関係や教師の省察に直接踏み込む内容を含む。Class Maps では保護者との関わり、Motivated School では教師の信念のアセスメントも含まれ、教師の信念→教授スタイル→子どもの性格や学習スタイルとの相互作用→風土全体のありよう→保護者(学級外の環境)との関係、と重層的なモデルが直接に方法に反映されている。また、具体的改善方法の明確化・可視化の方向づけも強い。教師一生徒関係に踏み込むことや、プランの明確化は日本では敬遠・軽視されやすい。しかし教師自身に関する情報や、プランの明確化は、より精緻な省察の推進力にもなりうる。理念の共有で動機づけを高め、校内で受け入れられる範囲を押し量りながら、省察を深め手立てを具体化するワークシートをつくるなど、両方法に学びつつ支援の方法を改善・試行することが、今後課題である。

【引用・参考文献】

- Benard, B. (1993) Fostering Resiliency in Kids. Educational Leadership, 1993Nov, 44-48.
- 伊藤亜矢子 (2011) 全校型支援のヒントーアイルランド, スコットランドの実践に学ぶ 子どもと学校臨床4巻 113-120.
- 伊藤亜矢子 (2010a) 全校型支援を行うスクールカウンセリングの理論的検討①ー全校型支援をめぐる現状と課題ー 日本教育心理学会第52回総会
- 伊藤亜矢子 (2010a) 全校型支援を行うスクールカウンセリングの理論的検討②ー「スクールカウンセラー」の役割を中心にー 日本心理臨床学会第29回大会
- 伊藤亜矢子 (2009) 学校臨床心理学 北樹出版
- Doll, B. Spies, RA., LeClair, C.M., Kurien, S.A. and Foley, B.P. (2010) Student Perceptions of Classroom Learning Environments: Development of the ClassMaps Survey. School Psychology Review, 39 (2), 203-218.
- Doll, B., Zucker, S., & Brehm, K. (2004) Resilient Classrooms; Creating Healthy Environments for Learning.
- McLean, A. (2009) Motivating Every Learner. Sage Publications Company.
- 〈付記〉本研究は科研費基盤(C)20530623「パッケージツールと支援サイトによる日本型SCの学校全体への支援」、同基盤(C)23530891「国際比較による東アジア型スクールカウンセラーの全校支援モデルとツールの構築」(研究代表者・伊藤亜矢子)による。

歴代大会記録

回	大会長	副大会長	事務局長	開催地	開催日時
1	山本 和郎		久田 満	安田生命アカデミア	1999年3月21・22日
2	安藤 延男		平川 忠敏	KKR ホテル博多	2000年3月20・21日
3	植村 勝彦		榊原 國城	愛知淑徳大学星が丘キャンパス	2001年3月24・25日
4	石郷岡 泰		吉武 清實	かみのやま温泉 月岡ホテル	2002年3月22・23日
5	福山 清蔵		箕口 雅博	立教大学新座キャンパス	2002年12月7・8日
6	平川 忠敏		花月 彰子	鹿児島県自治会館	2003年6月28・29日
7	村本 邦子		西 順子	立命館大学衣笠キャンパス	2004年6月25～27日
8	塩谷 亨			金沢工業大学	2005年7月1・2日
9	加賀美登美代		守谷 智美	お茶の水女子大学	2006年7月1・2日
10	北島 茂樹	田嶋 誠一	澤 聡一	九州大学西新プラザ	2007年6月30・1日
11	田畑 治	江口 昇勇	八田 純子	愛知学院大学日進キャンパス	2008年6月14・15日
12	吉武 清實	菅井 裕行 池田 忠義	佐藤 静香	東北大学川内北キャンパス	2009年6月20・21日
13	箕口 雅博	福山 清蔵	大石 幸二	立教大学新座キャンパス	2010年7月18・19日
14	久田 満	丹羽 郁夫	安田みどり	上智大学四谷キャンパス	2011年7月16・17日

日本コミュニティ心理学会第14回大会 協賛・後援団体一覧

東京大学出版会

ナカニシヤ出版

北樹出版

50音順、敬称略

本大会を開催するにあたり、上記の方々より多大なご支援をいただきました。
ここにご芳名を記して感謝の意を表します。

第14回大会 大会長	久田 満
副大会長	丹羽 郁夫

第14回大会準備委員会

委 員

久田 満 (大会長・上智大学)	丹羽 郁夫 (副大会長・法政大学)
安田みどり (事務局・上智大学)	岡田 瞳 (鉄道会社)
川上 華代 (上智大学)	菊住 彰 (慶應義塾大学)
杉浦久美子 (久里浜アルコール症センター)	高橋 直 (東京都市大学)
高橋 美保 (東京大学)	田丸 勇祐 (足立区立小学校スクールカウンセラー)
萩原 豪人 (慶應義塾大学)	藤林 亮平 (相模原市児童相談所)

院生スタッフ

青木 那奈 (法政大学大学院)	赤坂 誠人 (法政大学大学院)
池田 芳弘 (法政大学大学院)	井上 麻衣 (上智大学大学院)
加藤 直美 (上智大学大学院)	佐々木俊英 (上智大学大学院)
佐藤 希 (法政大学大学院)	佐山 七生 (法政大学大学院)
椎橋 亜耶 (法政大学大学院)	椎橋 里穂 (法政大学大学院)
隅谷 理子 (上智大学大学院)	妹尾真知子 (上智大学大学院)
谷合まなみ (法政大学大学院)	塚越菜緒子 (上智大学大学院)
中島 諒子 (法政大学大学院)	中時 綾子 (法政大学大学院)
名和友里恵 (上智大学大学院)	野中貴美子 (法政大学大学院)
平岩 一馬 (法政大学大学院)	増成亜衣子 (上智大学大学院)
益丸 安代 (法政大学大学院)	矢口 好恵 (法政大学大学院)
柳澤明希納 (法政大学大学院)	吉田 朱里 (上智大学大学院)
梁 恵 (法政大学大学院)	王 碩 (上智大学)

第14回大会のシンボルマークについて

大会テーマの「多様性」をイメージしました。個性豊かな人々が、本学会（JSCP）によって緩やかにまとまっている様です。はみ出ている人もいます。

シンボルマークデザイン：大久保 拓子

日本コミュニティ心理学会第14回大会 プログラム・発表論文集

2011年6月発行

編集：〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1
上智大学総合人間科学部心理学科コミュニティ心理学研究室内
日本コミュニティ心理学会第14回大会準備委員会
(事務局) Tel：03-3238-3827
E-mail：communitytaikail4@yahoo.co.jp

出版：(株)セカンド  学術集会専門出版社
株式会社 セカンド
〒862-0950 熊本市水前寺4-39-11 ヤマウチビル1F
TEL：096-382-7793 FAX：096-386-2025